

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	笠原 良太
論文題目	石炭産業の漸次的撤退と閉山離職者の子どものライフコース — 雄別炭砒株式会社尺別炭砒の閉山と中学生に関する追跡研究 —
審査要旨	
<p>本論文は、1970年に閉山した北海道尺別炭砒を事例に、炭鉱閉山で解雇された労働者の子どもが、父親の再就職と家族の転居や移動によって受けた、進路上の短期的影響と、その後の進学・就職などの中長期的影響を、ライフコース論の枠組みを用いて分析・説明する実証研究である。具体的には、閉山時の中学生342名を対象とし、主要には閉山直後に彼らが書いた作文187人分と移動直後の手紙34人分を起点に、50年後に彼らへ追跡調査を実施し、そのデータ(量的データと質的データ)を用いた分析である。</p> <p>本論文は2部構成をとり、第1部「課題と方法」は、2つの章からなる。第1章「石炭産業の構造転換と炭鉱離職者の子ども」では、本論の根幹となる社会的文脈として、戦後日本における石炭産業の構造転換過程を、整理する。50年間にわたる国の石炭産業合理化政策の下、全国で多くの炭鉱が漸次的に閉山し、その離職者対策として、広域職業紹介による成長産業への再就職、産業都市への移動、移住が粛々と進められた。とりわけ、1967年から72年にかけては、本論の対象である尺別炭砒を含む大手炭鉱の閉山が、相次いだ。これまで社会学では、炭鉱労働者の合理化・閉山による産業転換については、支援策と再就職過程の動的把握が蓄積されてきた。しかし離職者に帯同して移動した家族、とりわけ子どもたちの人生軌道の攪乱、中長期的影響にたいしては付随的関心にとどまってきた。本研究はその嚆矢である。</p> <p>第2章「研究の枠組みと課題」では、本論の研究対象である尺別炭砒の概要を整理したうえで、理論的枠組みとしてライフコース論を採用することの利点が整理される。そこでは、1970年2月の閉山に、中学生というライフステージで遭遇した子どもたちの経験を、本人の加齢と社会歴史的変動との交差として迎えるデザイン(APCモデル)が採られる。その際、子どもたちを中学1年・2年生と3年生に大別して、進路におよぼした影響を精査する。さらに、『大恐慌の子どもたち』の枠組みを援用し、閉山から家族が受けた影響を、父親の再就職機会の規定要因となる、炭鉱における職位(職員、鉱員、組夫)と、父親の再就職状況(地域と就職形態)を組み合わせ、5類型に変数化し、説明変数の主軸に据える。</p> <p>第2部は分析編であり、4つの章で展開される。はじめに第3章「職縁社会における子どもの生活・教育と進路」において、炭鉱の最盛期である1950年代・60年代における尺別炭山コミュニティでの学校、教育の特性が描かれる。家族・子どもたちの日常生活と生活世界は、炭鉱経営・父親の炭鉱労働のシステムに完全に包摂された環境で展開した。こうした環境におかれた子どもたちが、1970年2月、唐突に閉山に直面し、短時間での転出を強いられた。彼らがこの事態をどのように受け止めたのか、第4章「炭鉱の閉山と中学生の状況理解・計画的な能力」では、閉山決定直後に書かれた中学生の作文内容から、炭鉱閉山に直面した中学生の受け止めを、個々人の状況理解・計画的な能力として析出し、変数化した。</p> <p>第5章「父親の再就職と中学生の転校と進路」と第6章「父親の再就職と高校生の適応・進路」では、学齢段階、父親の再就職類型、中学生の計画的な能力の3点を説明変数に、中学生の転校と進路での適応が詳細に検討される。分析を通して以下が明示された。彼らは、中学生という「あまりにも人生経験に乏しく、非常に多感な」人生タイミングに、父親の閉山離職と再就職、それにとまらぬ都市部への転居と転校を経験した。とりわけ中学3年生は、閉山が高校入試直前であったため、その影響はもっとも深刻であった。全学年とも、転出後の諸課題への対処方法と活用資源は、父親の就職先の産業、地域、企業の属性によって明確に異なっていた。さらにこの経験は、彼らのその後の職業意識形成に強く作用した。他方、同じ条件下でも中学生は、個人の有する計画的な能力に応じた適応過程を示した。加えて、尺別炭砒閉山が高度成長期に発生したという特性を指摘することで、半世紀におよぶ石炭政策のコンテキスト上での位置づけも明確となった。</p>	

氏名 笠原 良太

審査委員会は、ライフコース社会学、教育社会学、社会階層論、地域社会学を専門とする 5 名の委員で構成し、それぞれの視点から本論文を学術的に評価し、課題を共有した。まず、ライフコース論の視点から、本論文は、ライフコースを構成するタイミング、重要な他者、個人の間行為力の3要素を用いることで、炭鉱閉山という大規模な社会変動・産業転換によって、労働者の子どもたちが被った、深刻かつ中長期的なライフコースの攪乱の動態を、精確に描出することに成功していると評価できる。他方で、課題として、「計画的能力」について、中学時代に保持していたとされるこの能力が進路選択や職業形成に一定の効果があったことはこの研究で示唆されたが、作文という資料から計画的能力を抽出する手法の制約も相まって、この能力の違いがその後のライフコースにどのような差異をもたらしたのかに関して、必ずしも論証されたとはいえない点が残された。

教育社会学からみた場合、高度成長下の中学生が突然直面した炭鉱閉山の影響を、当時の作文と現在のインタビューで実証的に分析した点が評価できる。特に、家族や本人が県外、あるいは県内でも他地域に移動できたか否かが高校進学や高校教育の受容に及ぼす影響が示唆されている点に本研究の意義がある。また、社会意識を醸成させる教育の意義と課題を間接的に描き出しており、尺別での経験が移動先において活用・理解されないことへの疑問や葛藤を描き出すことにより、近年の東日本大震災が被災地域の子どもたちに及ぼした影響を検討するにあたっての先行的知見として意義深い。一方で、枠組みとして人間発達の生態学によるアプローチがどこまで効果的であったかについては、課題として残されている。特に、方法や対象の限界もあり、高度成長下のマクロレベルの政策や就職状況、高校・大学への進学率をどのように捉え直すべきかについてはさらに検討すべき課題である。

社会階層論の視点では、地理的・空間的に他地域から切り離された「尺別炭山」を扱ったことにより、「職縁社会」の力学がいかにか子どもに作用し、地域移動の有無を含む父親の再就職(職業条件)が彼らのライフコースにどのような影響を与えたのか、彼らの「語り」から誠実に検討している点が高く評価できる。職員や鉱員はじめ、炭山内のあらゆる階層の子どもが一堂に会する中学校において書かれた作文を題材としたことも、保護者の社会階層の影響を検討するうえでは有効な手段であるといえる。

地域社会学からは、閉山によって地域共同体が消滅し、4,000 人もの人々がいかなる地域移動・産業移動を遂げたのかを記述したことが高く評価される。特に、子どもたちの父や兄といった炭鉱労働者の年齢やキャリアなどによって、移動のあり方が複雑に分化する状況は、地域移動のメカニズムをより適切に把握することに貢献している。一方で、移動先の地域の側に着目し、離職者家族の受け入れについての意識や体制のあり方などと、閉山離職者家族の生活や意識との双方向的な影響の分析を通じて、ライフコースや地域社会の変容についてのさらなる精緻な知見の提示が期待される。

本論は、国策による大規模な産業転換で労働者が強いられた産業・地域移動を、労働者の子どもに焦点をあて動的にとらえることに成功している。この枠組みは現代社会における諸現象を、高度成長期に発生した社会分岐の連続上で考察する視点の提供でもある。上記のとおり理論的・方法論的課題が残されているものの、審査委員会として慎重に審査した結果、本論文は学位「博士(文学)」(早稲田大学)を授与するに値する論文であると判断する。

公開審査会開催日	2022年 3月 26日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	嶋崎 尚子	ライフコース社会学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	沖 清豪	教育社会学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・准教授	津田 好美	社会階層論	
審査委員	琉球大学人文社会学部・教授	安藤 由美	社会学	
審査委員	群馬大学共同教育学部・准教授	新藤 慶	地域社会学	博士(北海道大学)